

SJ

The Safety Japan
since 1971

Close Up

クローズアップ 教育プログラム

こどもへの交通安全教育の効果を
維持するための教材を開発

Honda は、小学生を対象に児童向けのプログラムを活用した交通安全教育の効果検証を実施。その結果、1年の中で限られた交通安全教室の機会だけでは、教育効果を維持することは難しいとわかった。こどもが適切な行動や考え方を習得するには継続的な指導が必要であるとの考えから、教育効果を維持するために Honda が開発した教材と、その手法について紹介する。

小学校や幼稚園・保育園での
継続的な指導を支援するために

Honda は昨年、静岡県内の小学校と交通安全指導員の協力のもと、小学1～6年生（437名）を対象に Honda のプログラムを活用した交通安全教室によって、どのような行動変容があるか効果検証を実施した。交通安全教室を受講する前と当日、1週間後、1ヵ月後のタイミングで「横断歩道までの歩行状態」「横断前の停止動作」「横断前の左右の安全確認」「横断する意思表示としての手上げ」の行動を観察した。調査の結果、受講直後には一部歩行状態の改善や手上げの増加、飛び出しの減少などがあったものの、時間の経過とともに受講前の行動に戻る傾向がみられた。また、交通安全教室での指導員や先生の問かけが児童の行動変容に影響を及ぼすことがうかがえた。

教育効果を維持するためには、交通安全指導者による教室の実施後に継続的な指導が必要となる。そこで、Honda は小学校や幼稚園・保育園の先生方に登校直後の朝の会や下校前の帰りの会といった時間を活用して短時間で指導をできるような手法と教材を検討。先生方の意見をうかがいながら、手軽に使うことができ、こどもが楽しみながら安全な行動を意識できるような教材を開発した。



小学校の先生方による「デジタル交通安全かるた」を活用した指導

児童向け教材

「デジタル交通安全かるた」

児童向けの教材は「デジタル交通安全かるた」。これは「Honda 交通安全かるた※1」をベースに作成したもの。パソコンやタブレット端末を通じて、モニターやスクリーンにかるたの絵札を表示させ、その絵札が表している交通ルールやマナーなど安全な交通行動について児童に考えてもらう。次に、読み札を表示させて、絵札の意味することに気づいてもらう（クイズ形式）。絵札のアニメーション機能を使うことで、児童に興味を持たせながら様々な交通場面における安全行動を視覚からも理解してもらえるようになっている。かるた1枚あたりの指導時間は2分程度と、先生方の負担にならないように短時間で繰り返し学習が可能となっており、実施したい時間に合わせて複数枚を組み合わせるなど、アレンジして活用いただける内容となっている。

幼児向け教材

「歌って踊って『止まるニャン!』」

幼児期に交通安全行動にふれておくことは、小学校入学後にもつながる。幼児向けの教材は「歌って踊って『止まるニャン!』」を用意。既に多くの交通安全指導者に活用されてい

Contents

- P1 Close Up クローズアップ 教育プログラム
- P4 Close Up クローズアップ 交通教育センター
- P5 Close Up クローズアップ Honda の活動
Close Up クローズアップ 教育機器
- P6 SJ Interview 豊橋技術科学大学 准教授 松尾幸二郎さん
- P7 TRAFFIC SCOPE 交通参加者の行動を観察する
- P8 危険予測トレーニング (KYT)
SJ クイズ



Safety for Everyone

Honda はすべての人の
交通安全を願い活動しています。

SJ ホームページは

ホンダ SJ

検索

編集部：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山 2-1-1
TEL：03(5412)1736
<https://www.honda.co.jp/safetyinfo/>
編集人：横山謙一

※ご不明な点がございましたら下記までお問い合わせください。
(株)アストクリエイティブ安全運転普及本部係
TEL：03(5439)1191
E-mail：sj-mail@spirit.honda.co.jp

交通安全教育プログラム「できるニャンと交通安全を学ぶ※2 幼児編」に収録されている「できるにゃんたいそう（以下、体操）」をベースとしている。体操は「とまる」「みる」「まつ」という道路を安全に横断するための基本行動を幼児に身につけてもらえるように作成された。継続的に活用することで、楽しみながら安全な交通行動に慣れ親しむことが期待できる。最初のうちは映像を見ながら体操し、振り付けを覚える（体操は1分30秒）。そして、慣れてきたら、朝の体操や遊戯の前の準備運動に取り入れてもらうのである。体操に加え、体験パーツ「止まるニャン！」も用意した。これは幼稚園・保育園内の危険箇所の壁や床に貼るための標識と足型のイラスト。幼児に日常生活の中で「とまる」という行動を繰り返し体験することにより、習慣として身につけてもらうことが目的である。

短時間で交通ルールやマナーを再確認できる

Honda は完成前に4都県の小学校と幼稚園・保育園の協力を得て、先生方による「デジタル交通安全かるた」と「歌って踊って『止まるニャン!』」のテスト運用を実施した。静岡県浜松市立城北小学校では昨年12月に1～6年生のクラス単位で「デジタル交通安全かるた」を活用。1週間、朝の会または帰りの会など各先生が使いやすいタイミングで指導を行った。2年生のクラスを担当している教諭川端優紀子さんは朝の会でのかるたを1日1枚ずつ使用して指導を行った。「絵札に描かれているイラストがかわいかったので、こどもに好評でした。解説の部分ではイラストが動くので、低学年には言葉だけで説明するよりも理解しやすかったと思います。帰りの会で、こどもに『朝やったこと、覚えている?』と聞くと、読み札の内容を復唱したり、『明日は何のカードだろう』と楽しみにするなど、この1週間は交通安全に関して話す機会も増えました。こうした教材があると、継続的な交通安全指導がしやすくなると川端さんはいう。5年生を担当する教諭杉浦ゆみさんは、帰りの会や学級活動などで余った時間に使ったという。「短い時間で、基本的な交通ルールやマナーを再確認できる教材だと思います。読み札を解説する時は、交通事故の事例などにもふれるようにしました。絵札を見せると、自発的に発言してくれるなど、私が一方的に話すよりも、こどもが興味を持って参加するように感じました。指導を受けた5年生の児童に感想を聞くと、「絵札をみて、この後どうなるのか考えることを続けると、予想がつくようになりました」「すべてを一気にやるよりも、毎日少しずつ教えてくれるほうが覚えやすいと思



園児ができるニャンのお面を作成し、楽しみながら「歌って踊って『止まるニャン!』」を活用した指導

いました」「実際に起きた事故の事例など先生の話がわかりやすかった」という声が聞かれた。埼玉県和光市にあるHondaの企業内託児所「わいわいがーでん」は昨年12月から「歌って踊って『止まるニャン!』」を取り入れ、体操は2歳児以上を対象に約1カ月に1回のペースで実施している。保育士の宮脇恵美子さんは「最初は、私たちが体操する姿を見せて、こどもに動きを覚えてもらいます。こどもは身体を使った遊びが好きなので、すぐに振り付けに合わせて体操してくれました。体操の後、『あやとりいひよこ※3』を使って簡単な交通安全教室を行ったこともありました」と話す。今年1月からは保育室の出入り口に体験パーツを貼った（写真参照）。それまでは、保育室から廊下へ飛び出していくこどもがいたが、体験パーツを貼ってからは出入り口での動きがゆっくりになったようだ。「足型の前で止まって左右に首を振るこどももいます。足型の前では止まるという意識が徐々に浸透しているようです」と宮脇さんはその効果を実感している。「保育士の仕事で大切なことの一つに、こどもの命を守ることがあります。その中で交通安全指導も不可欠な要素です。この体操から交通安全への意識づけを始めることで、こどもたちが成長した時、自分で自分の命を守れる力につながっていければいいと思います。これからも保育活動の中で、体操を核にした交通安全指導を続けよう」と宮脇さんは考えている。実際に活用した先生方の声を反映し、「デジタル交通安全かるた」と「歌って踊って『止まるニャン!』」は2月に完成。Hondaは小学校や幼稚園・保育園への普及を進めている。



「わいわいがーでん」では保育室の出入り口に体験パーツを貼っている

- ※1 かるたで遊びながら「正しい交通行動」や「命の大切さ」について学べるようになっている教材。こどもたちに覚えてほしい交通ルールやマナーを45の絵札と読み札でわかりやすく紹介している。詳細は以下のホームページ参照。
<https://www.honda.co.jp/safetyinfo/karuta/>
- ※2 Honda交通安全啓発キャラクター「できるニャン」が登場するアニメーションを活用した対話型のプログラム。幼児編と小学校低学年歩行編の2種類ある。
- ※3 幼児（4～5歳）を対象としたHondaの交通安全教育プログラム。歩くことに焦点を当て、「どこを歩くのか」「どのように歩くのか」を考えてもらいながら交通安全の基本を学ぶことができる。

活用を希望される小学校、幼稚園・保育園、自治体、団体の方は下記にお問い合わせください。
本田技研工業（株）安全運転普及本部
TEL 03 (5412) 1150

児童向け教材「デジタル交通安全かるた」

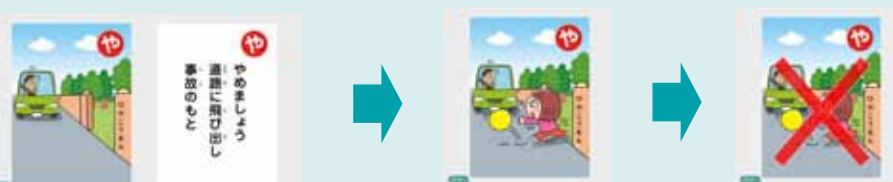


「デジタル交通安全かるた」は全45枚で構成されたPowerPoint形式のコンテンツ（歩行者19枚・自転車14枚・クルマ6枚・その他6枚）



絵札が表示している交通ルールやマナーをこどもたちに考えてもらう

読み札を読むことで、絵札の交通ルールやマナーに気づいてもらう



絵札のアニメーションや音が鳴ることにより、指導ポイントを明確に伝えることができる

幼児向け教材「歌って踊って『止まるニャン!』」

「できるにゃんたいそう」で交通安全行動に“ふれる”



「とまる」「みる」「まつ」の振り付け入り体操で楽しみながら交通安全行動を身につけてもらう

体験パーツ「止まるニャン!」で体験



園内の危険箇所の壁や足元などに体験パーツを貼り、日常の中で「とまる」行動を身につけてもらう

中学生がこどもへの 交通安全教育を考える

交通安全教育の効果を維持するための教材の開発にあたっては、より効果的な教材となるよう、こどもの目線からの検討も行っている。その一環で、目黒星美学園中学高等学校※4（東京都世田谷区）の協力のもと、小学生に近い世代である中学生にこどもへの交通安全教育を考えてもらう授業を実施した。

この授業を担当したのは同校社会科教諭の京百合子さん。中学3年の公民の授業で、世界で最も広く受け入れられている人権条約である「子どもの権利条約※5」について学んだ。2019年、日本政府が国連に提出した条約の履行状況に関する報告書に対し、国連子どもの権利委員会は交通事故や道路の安全に関して不十分であると指摘。京さんは、これに関連づけて、こどもの交通安全について生徒に考えてもらったのである。

こどもたちが日々交通安全を 意識できるプログラムを提案

「こどもの交通安全教育に貢献するためには、どうしたらいいかというのが出発点でした。ストレートに自分たち中学生の交通安全を考えるより、『こどもたちを事故から守るためにやる』と取り組むほうが生徒のモチベーションは上がります。さらに、アイデアを考える過程で、小学生の頃からの自分の交通行動を振り返ることができると思いました」と、京さんは授業のねらいを説明する。

授業は、Honda がこどもへの交通安全教育の教材を開発していることを紹介し、生徒たちにも同じテーマに取り組むという仮定の課題を提示するところからスタートした。テーマは「飛び出しをしない」「道路を渡るときは周囲を確認して、手を上げる」などの4つ。生徒たちはくじ引きで選んだテーマについて13の班に分かれて討議する。討議に先立ち、京さんは歩行中の交通事故死傷者数を年齢別にみると、小学1年生にあたる7歳が最も多いことや、こどもの特徴などを伝えた。

昨年7月に、各班が討議した結果を「小学1年生を対象にしたプログラム」として発表。このうち、3つの班が考案し

たプログラムを紹介する。

B組2班に与えられたテーマは「飛び出しをしない」。高学年が考えた交通安全に関する「お題（問題）」を毎日、1年生一人ひとりの下駄箱に入れる。受け取った1年生は「お題」について考え、朝の会で答え合わせを行うというものだ。同班の小俣さんは「私たちも中学1年生の時、登下校の中で『ここは気をつけないといけない』と思うことがありました。小学6年生は1年後に中学生になるので、そういう意識を小学生のうちから高めておく必要があると考え、高学年がお題を考えるというアイデアを思いつきました」と話す。

「道路を渡るときは周囲を確認して、手を上げる」をテーマにプログラムを検討したのはB組4班。家が近い高学年と低学年がペアになり、毎日の登校時に高学年が低学年に交通ルールを伝えるという手法を提案した。同班の徳田さんは、登校中の時間を有効に使うことができ、先生方の負担も減るのではないかと。「教えられた直後は注意力が高い状態になっていると思いますが、常にそのような状態とは限りません。1回限りで終わらせるのではなく、毎日、意識づけることが必要で、学んだことを習慣化することが大切だと思います。日々の学習活動の中で聞くだけよりも、人に教えるほうが知識を自分のものにできると感じています。小学校高学年には、そのようなことを学んでほしいと考えました」。

C組1班もテーマは「道路を渡るときは周囲を確認して、手を上げる」だが、それを含め、交通ルール全般を楽しく学ぶというコンセプトで検討。毎日、朝の時間（5～10分）を使って、小学1年生に交通安全かるたをつくってもらうという手法を導き出した。さらに、かるたを使って近隣の幼稚園児と遊ぶという参加型の長期プログラムを提案。同班の谷口さんは「交通安全を楽しく学べる方法がないか話し合っている中で、小学生の時、学校に幼稚園児が来た際に、カードゲームで遊んで楽しかったことを思い出しました。そのカードゲームは自分たちでつくったので、小学生につくってもらえば良いと考えました」という。谷口さんのアイデアに賛同した橋本さんと三村さんは「最初は、あらかじめ用意した読み札に合った絵札をつくることを考えていました。しかし、それでは事故を防ぐために何が大切か考えてもらえないので、ア行の読み札だけ用意して残りを考えてもらうという案にしました」と話す。

いずれの提案も、教育の継続性や時間の有効利用、先生方の

負担軽減といった課題を解決していこうという意思が感じられる内容といえる。

生徒が自分自身の交通行動を 改善するきっかけに

今回の交通安全の授業を通じて自分の考えや行動にどのような変化があったか、生徒たちに尋ねると、次のように答えてくれた。

「中学1年生の時は『自分が気をつけなきゃいけない』という意識しかありませんでした。最近は親が運転するクルマに乗っている時、運転する側にとって、どのような行動が危ないのかを考えるようになりました」（小俣さん）。

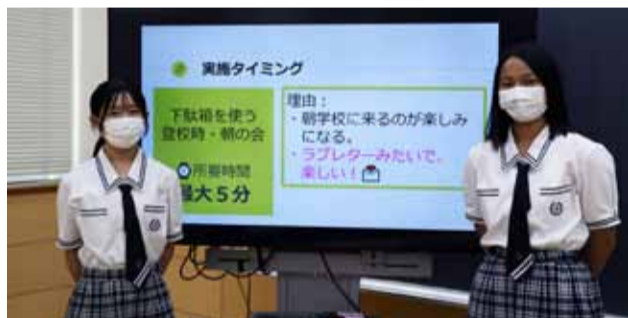
「交通安全の授業を受ける前は自分が事故の被害者になるかもしれないという視点でした。これまでの授業を通じて、自分が事故の加害者になる可能性もあることに気づきました」（徳田さん）。

「歩きスマホをする人が気になるようになりました。私は危険だと思うので、やらないように意識しています」（谷口さん）。「歩道を自転車で行くと歩行者の迷惑になる場合があるので、車道を走るように心がけています。歩行者用信号が青点滅になった時、急いでいても止まることを意識するようになりました」（橋本さん）。

「自転車に乗っている時にスピードを出さないように気をつけるようになりました」（三村さん）。

京さんが意図した通り、こどもたちの交通安全を考えることで生徒自身の安全意識も高まったようだ。「交通安全は身近なことでもあり、授業の中で手軽に取り組めた点も良かったと思います。生徒の発想力を鍛えるとともに、生徒自身が自分たちの行動を改善するきっかけになりました」と、京さんは今後も交通をテーマにした授業を行っていききたいという。

※4 2023年4月より「サレジアン国際学園世田谷中学高等学校」に校名変更。
※5 「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」は、こどもの基本的人権を国際的に保障するために定められた条約で、前文と本文54条からなる。18歳未満をこどもと定義し、世界のすべてのこどもたちに、自らが権利を持つ主体であることを約束し、大人同様、一人の人間としての人権を認めるとともに、成長の過程で特別な保護や配慮が必要なこどもならではの権利も定めている。1989年の第44回国連総会において採択され、1990年に発効。日本は1994年に批准した。2019年時点で、196の国と地域で締約されている。



写真左からB組4班の徳田さん、B組2班の小俣さん



写真左からC組1班の谷口さん、橋本さん、三村さん



目黒星美学園中学高等学校 社会科教諭 京百合子さん

目黒星美学園中学高等学校の中学3年生が提案したプログラム(抜粋)

B組2班

テーマ：飛び出しをしない

高学年が交通安全に関する「お題（問題）」を考案。それを毎日、1年生一人ひとりの下駄箱に入れ、考えてもらう。朝の会で答え合わせを行い、月間の成績を貼り出す。

具体的な内容

- ・下駄箱に1週間の間、ランダムに「お題」を入れる。
- ・朝の会で答え合わせ。
- ・月間ランキングを作る。

【貼り出し】 ← 1年生の目標に！！

教材について

お題の紙
(高学年に作ってもらう)

↑高学年も問題を作ることで
交通事故の危険性を再認識できる。

B組4班

テーマ：道路を渡るときは周囲を確認して、手を上げる

家が近い高学年と低学年がペアになり、登校時に高学年が低学年に交通ルールを伝える。人に教えることで高学年に知識の定着を図るというねらいがある。

具体的な内容

- ・朝礼で高学年と低学年に手を挙げる大切さを説明
- ・家が近い高学年と低学年でペアを作る
- ・高学年が低学年とゲーム感覚で確認しながら登下校

<高学年から低学年に教える理由>

- ・中学校1年生は、低学年の次に交通事故が多い
- ➡もうすぐ中学生になる高学年の子供たちにもう一度学び直してほしい
- ☆人に教えることで自分にも定着していく！
- ・先生が毎日登下校中の生徒指導をするのは大変
- ➡登下校が同じ児童同士だったら時間の無駄がない
- ・先生よりも年が近い方が、ゲーム感覚でできる

C組1班

テーマ：道路を渡るときは周囲を確認して、手を上げる

小学生にかかるたをつくってもらい、それを使って近隣の幼稚園児と遊ぶ。「つくる→遊ぶ→教える→学ぶ」という参加型の長期プログラム。

具体的な内容

- ・自分たちで「交通かるた」を作る
- ・地域の幼稚園に訪問し、一緒に遊ぶ
- ・「作る→遊ぶ→教える→学ぶ」という参加型の長期プログラム

<準備>厚紙・画用紙・色ペン・はさみ

この取り組みのポイント

幼稚園児に交通ルールを教えるという設定でかるたを作ることに
より、自分も幼稚園児も交通ルールを楽しく学ぶことができる！！